

アクティブ・ラーニングとICTを活用し、 知的好奇心と課題意識を喚起する授業

生徒の自覚を促す グランドルールの提示

授業開始の合図と共にプロジェクトにプレゼンテーションソフトの映像が映し出され、大神弘巳先生が呼び掛ける。「今日のペアとグループになる人に挨拶してください」。生徒が前後左右の生徒と目礼を交わすと、いよいよ授業が始まる。

今回の授業は、3年生・世界史の「地域紛争の激化と深刻化する貧困（図1）。先進国と途上国の格差、飢餓や貧困、内戦などの諸問題について知り、南北問題や南南問題について理解を深めるのが狙いだ。

前掲の座談会を受けて、大神先生が授業改善に据えたポイントの1つは、ルールの徹底だった。強引に議論をリードしようとする生徒、他者に安易に同調する生徒を生まな



授業開始のチャイムと共に雑談はピタリと止まり、背筋を伸ばして授業開始の挨拶。凜とした空気が教室を覆う。

めに、冒頭にプレゼンテーションソフトで「積極的に参加する」「お互いの考えを尊重する」「お互い協力して結論を導く」の3項目を示し、生徒一人ひとりがファシリテーターであるという自覚を促した。大神先生の授業は、プレゼンテ

ーションソフトのスライドを最大限に活用する。板書は一切せず、手元には授業で使うプリントが1枚あるだけ。ICT活用の目的は、板書の時間を節約すること、生徒の目線を上げることにある。先生が生徒に背中を向けることはなく、生徒も手元の

今回のクラスは進学希望者が半分程度。興味・関心を刺激して学習意欲を高め、自ら学ぶ姿勢をつくるのが課題のクラスである。

課題意識を高めるために 資料の示し方を工夫

教科書や資料集に目を落とす必要がないため、常に顔を上げていられる。写真やデータだけではなく、偉人が演説した際の音声データなどを駆使して生徒の五感に訴え掛けるのも、ICT教材ならではの強みだ。

プロジェクトに世界地図が映し出される。飢餓地帯を示した地図だが、生徒には地図のタイトルは伏せられている。これが何の地図なのかを考えるのが最初の課題だ。「話し合ってください」という号令が出る。生徒は慣れた様子で5〜6人で構成されるグループになり、討議を開始する。「何で貧困だと思う?」「中国も貧富の差が激しいよ」。生徒はお互いに意見を出し合いながら、積極的に話し合いを進める。

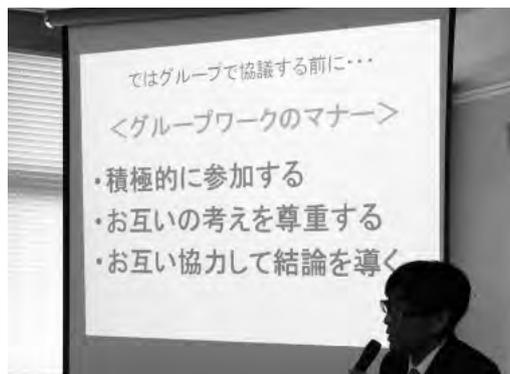
「ヒントは世界の死亡原因の1位」。討議の途中で、大神先生が話し合いを集約させていくための言葉を投げ掛ける。それから5分程話し合わせた上で答え合わせ。先生は、「A〓地域紛争」「B〓犯罪件数」「C〓飢餓状況」「D〓HIV感染率」

図1 大神先生の授業デザインシート〈3年生・世界史〉

【教科・科目】 地理歴史科 世界史B 【分野・単元】 地域紛争の激化と深刻化する貧困 【テーマ・作品】 第三世界の分化
 【設定時数】 6時間中の1時間目 【本時全体の目標】 現代世界の諸課題を資料から見だし、現代社会の特質を理解する

学習内容	自校の生徒の特性を踏まえた各学習内容における主な目標(身に付けさせたい力・姿勢)	左記の力・姿勢の「学力の3要素」への分類	左記の力・姿勢を育むための指導内容	教師による発問・働き掛けの内容	教師が特に観察・配慮すべき点
現代世界の各種資料を提示し、飢餓・貧困などの南北の格差問題を考察する。	資料を読み取る力と既存の知識から多面的・多角的に考察する能力	知識・技能 思考力	何も手掛かり(ヒント)を提示せずに、資料(題名を隠した飢餓マップ)を提示し、その題名(データ)を問う。まず、生徒それぞれ個人で思考し、候補として可能性があるものを出来るだけ多く挙げられるように促す。	地図の資料が負の要素であることを気付かせる。関連する資料を提示することで、課題の根深さ・複雑さをイメージさせる。	解答が複数となるオープンな発問のため、個人で考える時間を十分に確保する。
	班で協力して問題を解決する能力	多様性・協働性	5〜6人の班を編成。お互いの考えを基にして、班全員で協力して作業する。全員が協議に参加できるようにグループワークのルールを示す。	グループワークのルールを示すことで、協議のスムーズな進行を促す。関連するいくつかの選択肢を提示し、答えるだけでなく、選択理由を求めることで理解を深化させ、班員全員によって合意に至ることが出来るように働き掛ける。	生徒の特性を把握し、全員が公平に安心して協議できる場(フラットゾーン・コンフォートゾーン)を設定することで、お互いを尊重し、それぞれ個人の思考を大切にすることを育成する。
	データを読み取る力と既存の知識から多面的・多角的に考察する能力	知識・技能 思考力	協議の焦点化を促すため、新たな手掛かり(ヒント)を提示する。2つの事項(地図とヒント)から、更に具体的な解答を協議する。	2つの資料を明示することから、課題をより明確に出来るように働き掛ける。	独善的な協議支配や集団圧力による同調行動に陥らないように、注意深く机間指導することで、班協議のスムーズな進行のサポートを行う。
	協議内容を適切に考察し、有用な意見・情報をまとめ導いた結論を、適切に表現・説明する能力	表現力	班で協議した内容を班ごとに発表し、クラスで共有する。	発表が解答だけで終わらず、円滑に行われるように、選択理由を問うなど、臨機応変に助力する。	発表者が内容・声量・速さなど、分かりやすく発表しているかを観察する。
飢餓の特徴を考察し、その原因を探る。その原因の1つである貧困がもたらす諸問題から南北問題について考察する。	地域による特徴から有用な情報を選択して読み取る力	技能 判断力	生徒それぞれが資料(飢餓マップ)を考察し、地域の特徴を分析する。	クローズドクエスチョンでテンポ良く解答するために、空欄問題を事前に準備する。	資料を根拠に公正に判断する態度を養わせる。
	資料を読み取る力と既存の知識から多面的・多角的に考察する能力	知識・技能 思考力	協議の手掛かりとして新たな資料(題名を隠した貧困率マップ)を提示する。2つの資料から更に協議する。	2つの資料が類似していることから、問題の根深さや複雑さなどに気付くように働き掛ける。	世界史を点ではなく面で理解できるように、異なる要因を総合的に見る目を養う。
	現代世界の状況について講義や資料を基に理解を深化させる力と多面的・多角的に考察する能力	知識・技能 思考力	貧困問題から現代世界の諸課題を発見し、新たにインプットした事実を基に、生徒がそれぞれ、またはグループで考察する。	具体例を示し、貧困は根源的な問題であることを導き、複数の解答を求めめることで思考を深化させる。	解答が複数となるオープンな発問のため、個人で考える時間に配慮する。
南南問題を通して発展途上国の格差について考察する。発展途上国の問題から現代世界の課題を学ぶ。	現代の世界の諸問題を知ることによって課題意識を高め、それを意欲的に探究しようとする力	主体性・多様性	現代の世界の人口爆発・内戦・紛争などの諸問題を知ることから、今日的課題を発見する。	生徒の心を揺さぶり、課題を実感できるような、タイムリーで今日的な問題を題材に選ぶことで協議の活性化を促す。	・偏った立場からの取り扱いを避け、生徒自身が客観的、公正な目で取り扱えるように支援する。 ・全員が話し合いに参加できているか、他人の意見や態度を尊重できているか、建設的な協議が出来ているか、観察・配慮する。
	本時に学んだ内容から自ら根拠を探して、班で協力して問題解決を成し遂げる力	主体性・多様性・協働性	5〜6人の班を編成。お互いの考えを基にして、班全員で協力して作業する。全員が協議に参加できるように、役割分担を示す。	NPOなどの例を示し、これらの課題が全人類の課題であることに気付かせる。	
	班で協議した内容を他の班員に説明し、理解させる力	表現力	それぞれ1〜6人の班員で班を再編成し、班ごとに自分の班で協議した内容をそれぞれ発表し、クラスで共有する。	班ごとに協議が活性化できるように、声掛けなどの働き掛けを行う。	
内紛が続くアフガニスタンの現状について考察する。	現代の世界の諸問題を知ることによって課題意識を高め、それを意欲的に探究しようとする力	知識 主体性	具体的な現代の世界の諸問題について多面的・多角的に考察する。	紛争被害者の立場から考える。	
今回の単元についての振り返り(リフレクション)シートを作成する。	客観的に自己や集団を分析できる能力	判断力・表現力 協働性	振り返りシートの項目に沿って、グループで協議する。	振り返りシートの意義・目的を説明することで、形式的に協議が終わることを防止し、協議の深化を促す。	公正で客観的な立場で分析できているか観察する。

の4つの選択肢を示し、生徒は一斉に自分の解答を示す。生徒の解答は、紛争と飢餓が多かった。
 ここで答えが明かされると共に、飢餓は爆発的に増えていること、現在も1分間に17人が飢餓で命を落としている現状が大神先生から語られた。そして先生は「こんなこと思っていないですか?」と、プロジェクトに「飢餓は貧しい国だけの問題」「働かないから飢餓に苦しむことになる」といった言葉を映し、生徒に問い掛ける。「では、飢餓の原因について話し合ってみましょう」。
 「授業全体を通して特に意識しているのは、いかに課題意識を高めるか。自分とは関係のない遠い国や過去の話だと思った瞬間に、学習は単なる作業になってしまいます。主体的に授業に参加させるために、課題意識を持たせることは非常に大切ですよ」(大神先生)
 生徒の「気付き」を促す教材や発問にこだわる
 プロジェクターに2枚目の地図が



ペア・グループワークの際に守るべきグラウンドルールがプロジェクター上に示される。座談会を受けての改善点の1つ。

映し出される。1枚目とほとんど同じだが、こちらは貧困率を表している。飢餓と貧困の違いは、先生が言葉で説明すれば1分程度で済むだろう。しかし、あえてそれをしないのは、生徒自身の「気付き」を促したいからだ。「私が教えるのでは、単なる知識のインプットになるだけです。貧困と飢餓は表裏一体であるということを生徒自身に気付かせることで、より多面的・多角的に事象を見る視点を養いたい」と大神先生は語る。

その後、「ボツワナの2004年の平均寿命34歳」「ジンバブエの失業率94%」など、途上国の現状を示

すデータが矢継ぎ早に示され、再び大神先生が問い掛ける。「本当に世界は食糧が足りていないのか、ペアで話し合ってください」。課題と共に「最初は右、次は左の生徒が意見を述べる」というルールも示される。話し合いの手順を示して交通整理を行うことで、空白の時間をなくすのが狙いだ。

途上国の実情が分かりかけてきた生徒たちにも、この問題は難しかったようだ。3分程ペアで話し合った後、挙手させて全体の意見を聞く。食糧が足りていると思う生徒と、足りていないと思う生徒の割合はほぼ半々。実際は地球の全人口の2倍の人数を賄うだけの穀物が生産されているが、その多くが廃棄されている。日本国内でも食糧の3分の1が捨てられているのだ。「私たちにも出来ることはたくさんあると先生は思います」と呼び掛け、再び生徒の課題意識を喚起する。「世界史では、知的好奇心を喚起することが特に大切。知りたい、理解したいというところから、解決したいという主体的な意識にまで引き上げたい」と大神先生は言う。

クローズドとオープン の タイミング、バランスが大切

大神先生の授業では、生徒同士が議論しやすい環境づくりも配慮されている。生徒の席の配置は、担任や副担任と相談し、生徒の学力やキャラクター、人間関係まで調べた上で、リーダーシップが発揮できる生徒、世界史が得意な生徒などがバランスよく入るようにグループを構成している。

ペアワークに際しては、最初は右の生徒、次は左の生徒というように、あらかじめ大神先生から手順が示される。

に魅力がなければおいしく食べられないのと同じように、いくら教材が良くても、グループのメンバー同士の相性が良くなければ、学習意欲は下がります。議論を活性化する上でメンバーの選定は非常に大切です」(大神先生)

そうした配慮には生徒も気付いており、「先生、このグループのメンバー構成、よく考えられていますね」と言う生徒もいる程で、生徒自身も居心地の良さや話しやすさを感じているようだ。

発問は、クローズドクエスションとオープンクエスションのバランスを常に意識している。「日本のGDP成長率は?」「世界の首都で一番人口が多いのは?」といったクローズドクエスションの合間に、飢餓の原因や貧困がもたらす問題など、多様な答えが想定される問い、答えが複数ある発問を織り交ぜる。ただし、授業内容が多いので、1回の問いにそれほど時間は掛けない。知識・理解の確認については1分程度、オープンクエスションは5〜10分程度の時間を与えて話し合わせる。

グループ討議のさなか、机間指導

をしていた大神先生が突如生徒にマイクを向け、座ったまま意見を言わせる場面も印象的だった。この日の授業は、通常の2倍程の大教室を使用し、先生はマイクを使って授業を進めていた。「通常の発表のように、指名して立たせる発表だと生徒は構えてしまい、声も小さくなりがちです。マイクなら声は教室全体に確実に届きますし、座ったままなので、生徒も指名されているという意識を持ちません。討議と並行して発表させることで、『●●があんなこと言っているぞ』と、他のグループの議論を活性化させる効果もあります」(大神先生)

ただし、年度当初はほとんどオンラインは使わないという。ただ、今年度は当初はほとんどオンラインは使わないとい

マイクを使って、座ったままの生徒にインタビュー形式で発表させた。大教室ならではの取り組みだが、気軽に発言できるメリットがある。

う。クローズドクエスチョンからステップアップしていき、クラス内の人間関係がある程度で上がる1学期後半くらいから、徐々にオープンクエスチョンを増やしていく。

オープンな問いで授業を終え、次への期待感を醸成

その後、授業は飢餓や貧困、紛争、疫病に悩む途上国が南半球に多いことを明らかにした上で、発展途上国間の格差である南南問題へ進む。UNCTADやNIEESの役割、都市のスラム化が進むムンバイ、内戦で苦しむコンゴやスーダンなどの現状が、データや写真と共に解説される。最後に、「世界の紛争・飢餓・貧困などの諸問題についてどう思うか、または世界でどのような活動が行われているのか」というテーマについて、次回までに「振

り返りシート」に記入するよう指示。次の授業でグループ討議と発表を行うことを予告して授業を終えた。「最後の質問は典型的なオープンクエスチョン。次の授業への期待感を高めるために宿題にしました」と大神先生。次の授業では、生徒同士でテーマを決めさせた上でグループ討議を行い、いったんグループを解体。新しいグループ内で考えを共有した上で、元のグループに戻って振り返りをさせる予定だ。

「今回の授業では、ルールについて若干改善の兆しが見られました。いつもは1人でしゃべる生徒から、『自分はこう思うけれど、●●君はどうですか』といった発言が見られたのは大きな前進です。ただし、安易に他の生徒の意見に同調する生徒は何人か目に付いたので、そこは引き続きの課題です。今回の振り返りは十分に時間を取り、討議の内容や発表を通して課題意識が醸成されているか、意見の深まりは見られるか、知識が定着しているかを見ていくつもりです」(大神先生)

特集

これからの授業と教師の役割

教える、そして共に学ぶ存在へ